

『凜然グッドバイ』

樋口ミユ

セン／（調査員 b・娘・17・研修生・R・ディラーの D）
デモ／（調査員 a・先生・先輩・医者・役人・S）

男

はじまりのまえ（開演中のアナウンス）

いつかどこかの、廃れたパビリオン。

誰もいない。

壊れたようにただ繰り返される案内の声。

誰もいない。

繰り返され続ける。

延々と。

永遠に。

「みなさん。こんにちは。我々のミッションへようこそ」

「今から我々がすべきことは、地球外生命の存在を探る宇宙探査、新たな星への可能性の旅、それがミッションであります」

「ハロー、ハロー、こちら地球号、応答願います」

「ハロー」

「ハロー」

「ハロー……」

「ケプラー452b 地球から1400光年。専門家は「地球のいとこ」と表現。恒星との位置関係など地球に条件が近いいため、生命の存在に必要な液体の水がある可能性もある。恒星は太陽よりも15億年古い「60億歳」生命体が生まれるのに十分な時間」

「ケプラー186f 地球から500光年。生命体が存在する可能性も叫ばれている」

「ケプラー62 太陽系から1200光年。水が存在する」

「ケプラー438b 直径が地球よりも12%大きい。岩石質である確率は70%」

「ケプラー442b 地球より3割ほど大きい。岩石質である確率は60%」

「ケプラー22b 大きさは地球のほぼ2.5倍。大気や地表の成分についてははっきりわか

っていない」

「ケプラー69ーc 大きさは太陽の約70%。地球よりも70倍ほど大きく、スーパービーナスと名付けられている」

「ケプラー22b 太陽に似たケプラー22を周回する。表面温度がマイナス11度からプラス22度までであるとされている。水液体の状態である表面に存在する可能性が極めて高いが、まだ研究段階の域を出ない」

「グリーゼ832c 地球から16光年。地球と似たような物質で構成されている惑星。主星に対する公転周期は約36日。地球と極めて似た大気や温度、湿度を持ち、驚くことに四季まである可能性がある。表面に水の存在までもが確認でき、生命体が存在する可能性がある」

「グリーゼ581ーc 太陽系から20光年。穏やかな惑星。星全体は水でできている。気温は穏やか、青空が広がり、空高く太陽が見える」

「グリーゼ581ーd 暴風が吹き荒れる。大気があり、生命がいる可能性が高いスーパーアースとして位置づけられている」

「グリーゼ581g 地球から約20光年。発見者は「この惑星に生命が存在しうる機会はほとんど100パーセントだ」と述べているが、この星が存在するかどうか、現在も議論が交わされている」

「HD40307^a 地球から約42光年。HD40307のまわりを約200日で周回している惑星。生物のいる可能性が十分にあるとされている」

「HD33512ーb 質量は地球の3・5倍。軌道周期は54日」

「かに座55番星e ほとんどがダイヤモンド。質量は地球の8倍。高圧力、炭素と鉄が大量に存在する。3分の1は宝石でできている」

「16キルクノスーb 1年は26ヶ月。17ヶ月の間は氷点下112度。氷の世界。2ヶ月は地表が沸騰する。残り7ヶ月は春と秋、穏やかな季節。巨大な海があり、大地は広大、空は雲に覆われている」

「タイタン 土星の衛星。太陽系内にあり、雨は降り、山や雲、海があるが地表の温度はマイナス178度。大気中には濃いメタンが含まれているが、生命を構成する基本要素がいたるところに。初期の地球に極めてよく似ている」

「エウロバ 木星の衛星。氷棚の崩れた部分から、その下に巨大な湖があることがわかり、それが塩分を含んでいることが判明。水生生物が存在した可能性がある」

「エンケラドゥス 土星の衛星。地表の99%が氷で覆われていてその氷の下には水があると推測。有機生物がいてもおかしくない星のひとつ」

「プロキシマ・ケンタウリb 太陽から約4.2光年の位置にある、太陽に最も近い恒星を周回する。生命が住居できる可能性があるハピタル・ゾーン内にある。表面に水が液体として存在できる可能性がある。ただしこの惑星に、生命が暮らせる環境があるという直積的な情報はまだ収集できていない」

そしてまた振り出しに戻る。

「みなさん。こんにちは。我々のミッションへようこそ」

「今から我々がすべきことは、地球外生命の存在を探る宇宙探査、新たな星への可能性の旅、それがミッションであります」

「ハロー、ハロー、こちら地球号、応答願います」

「ハロー」

「ハロー」

「ハロー……」

繰り返され続ける。

延々と。

永遠に。

以上の言葉は来場中に流れるアナウンスである。

超高速で進む。

光の速さも超えて。

宇宙で超高速に進むと、どんな音がするだろうか。

というか、宇宙それ自体が超高速。

調査員 a が船のハンドルを握っているだろう。

調査員 b がその後ろでしがみつく。

調査員 a 果たして……！

大きなゴーグルのようなものを顔につけて、

その表情はよく見えない。

が、声の様子からもう彼らには未来がないように感じる。

調査員 a 果たして我々は見つけることができるのだろうか……！ 漂う溺れる沈み続けるその只中で果たして、我々は、

調査員 b が身を乗り出して、眼前にある操作パネルらしきものを覗き込む。

調査員 b 気がつけば遙か100光年後ろに故郷……！ こんなところまで漂ってきました。今、目の前にあるのは故郷そっくりの惑星、です、がっ……！

さらに超高速で進む。

なにかが軋んで悲鳴をあげるような音までする。

調査員 b これ以上は保ちません！

調査員 a 保たせろ！

調査員 b 大破してしまいます！

調査員 a 宇宙の星屑になるまえに果たして我々は、

調査員 b ハローハローこちら地球号応答願います！

調査員 b が思わず、手を突き出して何かを掴み取ろうとした。

思わ、ズ。

調査員 a 手伸ばしてもつかめないぞ生命体は、

調査員 b どうせわかりやすい染み付いた習慣ですよどうせ。

調査員 a その先どうにも果てない只中徒に探るだけの指先。昼と夜をわける。漂う溺れる沈み、続ける。もし、生命が存在するなら。ゆびさき。境界線地点付近。指先乗っかるのはウズ。ぐるぐるまわる波紋、これは嵐だ。あそこだと指差す先にいつだって嵐。目指す方向指し示す時にはいつだって嵐。自分の指に乗っけて。

調査員 b タイソウに言ってるけど、それただの指紋のことですよねええええ！

調査員 a やっかいなんだ指先は。嵐が乗っかってるからポチツとなって押しちゃうんだなあいろんなキツカケをさあ！

調査員 b そんなら脱出ボタン押しましょうよおおお。

調査員 a あるかなもん。調査探索探検隊はいつだって片道燃料のみだ。

調査員 b 片道切符じゃ探索になりませえええんああもう本当に保ちません。

調査員 a いや保たせろ！

調査員 b 大破しますもう限界もう失神しますこれにて！

調査員 a、思い切り頭を後ろへのけぞって、

調査員 a ちえい！

調査員 b あうつつつ！

調査員 b に頭突きを食らわす。

調査員 b ありがとうございます。目が覚めました。

調査員 a ついでに目を開け！ 可能性の星に必要なのは水、の存在。あとは、

調査員 b 生命体の発見！ しかし！

調査員 a なんだ！？

調査員 b 見つからないような気がして、

調査員 a 見つけるように最善を尽くす。

調査員 b だいたいこういうのって3代後に発見されるパターンじゃないですか！？

調査員 a 3代未来先に託すから今はこんな程度で切り上げて出来ないだろう！？

調査員 b だからって選びますか！？

調査員 a あああああつ！？ この非常事態に質問事項とはいいい度胸だ！

調査員 b 例えば。新しい惑星に水も生命体もいて快適に住めると分かったとして選びますか？

調査員 a 贅沢言うじゃないか。もうすぐにでも住み替えるしかない故郷、選ぶなんて余裕があるわけないだろう！ 目を開け！

調査員 b 開いております！

調査員 a 見えているか！

調査員 b 見ております！
調査員 a 我ら故郷の星は何色だ？

調査員、アナログに振り返る。

調査員 b 闇です。真っ黒。汚染された星。沈みゆく星、それでもまだ人がおります。嘗んでおります。
調査員 a 振り返るな。進むその指先だけを見る。新たな可能性の星へ。

調査員、アナログに前を向く。

きつとなにかが見えた。

調査員 b 見ております……

調査員 a 見えるか……

調査員 b 見えます……！

調査員 a 新たな星が。

調査員 b 見え……

調査員 a ハロー……ハロー……こちら……地球号……応答……願います……

調査員たち、目の前の宇宙を見た。

What a wonderful world

宇宙飛行士からのリクエストNo1

ゆえに、その音楽は宇宙で聞くのが一番良いだろう。

宇宙のただなかで、

誰かの詩が聞こえる。

調査員 a シ。

調査員 b し……？

調査員 a 詩。

調査員 b 詩。

調査員 a 歌ってる……

調査員 b 空が……？

調査員 a いや、闇が……

調査員 b 違う、

調査員 a 星が……？

「宇宙は私で、私は宇宙だ」

指さすそこに小さな嵐

吹き荒れる風をくぐり抜け

そこに

やがて

そこに

そら

ほし

そらそこに

ほし

ほらここに

そらあそこにそこにどこにここに

ふりかえる20光年向こうから

故郷の星がやってくる

見据える20光年向こうから

新たな星がやってくる

ひとつ

ふたつ

そらそこにほらここに

そらあそこにそこにどこにここに

いままでのものと

これからのものが

出会って

すれ違って

分かれる

そらその一瞬

挨拶はハロウ

挨拶はグッドバイ

「現在、詩人の数がまったく足りておりません。詩人の数は決まっています。独りの詩人が消えれば、独りの詩人が生まれる。しかし、詩人の数は足りておりません。今、メディアに乗って、電波に乗って、呼びかけます。あなたこそが詩人ではなかったのでしょうか？絶対数に満たない。

まだ気がついていない、
未だ詩人となっていない、
隠れ詩人がいるはずなのです。

自分自身でも詩人と気がつかず
今その人生を終えようとしている、

もしくは全く別の人生を選ぼうとしてるあなたこそが、
あなた自身が、

詩人なのではないでしょうか。

臨時ニュースを繰り返します。

現在、詩人の数がまったく足りておりません。

臨時ニュースを繰り返します」

ニュースは再び、ぎざぎざと波の間に間に消えていく。

世界各国に流れる。

同じニュース。

あらゆる言葉で。

あらゆる国で。

詩人を募集するのだ。

ニュース、そしてノイズ。

波の音は、いつしか、

嵐の音に変わる。

全てを、なぎ倒すような、

風、風、風ばかり。

「嵐の中、葬儀に参列したのはただ一人」

故郷。

棺ひとつ。

傍らに娘がひとり。

家の外には、デモ。

暴風の中、やってきた。

デモ お悔やみ、申し上げます。

嵐のせいで、かき消されそうだが何度も繰り返す、
娘、ふと外の音に耳を傾け、扉を開けた。

デモ お別れを、いえ、ご挨拶を…

ずぶぬれのデモ。

棺がひとつ。

誰もいない葬儀。

デモ お久しぶりです。先生。

デモは、棺にかけてある毛布に目を止めた。

デモ これ…

その毛布を握りしめる。

娘、デモを見つめた。

デモ 言葉が、皮膚の下で這い回りはじめました。明け方足がつって目が覚めて、その瞬間まさか
かと頭をよぎりました。今頃になって、先生の言葉に撃たれた跡が。

娘はただ見つめるだけ。

デモ 長い時間をかけて。あの頃、先生の膨らんだお腹の中のあなたがこうなるくらいの時間を
かけてやっと今動き出しました、だからやってきました、嵐の中。

デモは部屋の中を見渡した。

デモ 参列者は…私、一人だけなんですか…？

娘はただ頭を下げた。

デモ 連絡は？ ちゃんと連絡しました？ 私はただ明け方にこの胸騒いでここに勝手にやってきただけです。おぼろげな記憶を辿ってまたここへ。故郷まで。連絡は？ 誰も知らないなら参列のしようがないじゃないですか、今、ひとりの、詩人が、消えたって。

娘 シジン、ナイデス。カ？

デモ え？

娘 ハハ、ロクデモ、ナイデス。ハハ、マケタヒトデス、カ？

デモ 負け、る？

娘 ダカラ、イマココ、ダレモイナイ。ソノショウコ。アー、オマエタダヒトリ、イマス、カ？

デモ あなた、

娘 ワタシ、ハハ、ヨクシラナイ、デス、カ？ ハハ、シンダヒト。モトモト、シンダヒト。ネ？

デモ あなた、もう新しい、あちらの言葉を使うんですね？

娘 ダイジヨブ、ソツチノ、スコシハナセル。アーワカリマス、カ？

デモ ええ。

娘 ハハ、ズットウゴカナイシニン。

デモ 死人？

娘 ワタシ、ハハ、ヨクシラナイ。マケテロクデモナイヤクニタタナイ、ダケノハハ。

デモ 先生は、自分のこと、あなたに何も話さなかったんでしょうか？

風が窓ガラスを叩く。

娘もデモも、びくりと振り返る。

デモ いつまでも…ここは止まない嵐ばかりね。

娘 ワタシ、ムコウノガッコウバカリデマナブ。ハハ、ハ、ウゴカナイシニン、デシタ。アー、スツキリス。

デモ え？

娘 シンデスツキリ。ヤット、ホントウノ、シニン、ナリマシタ。

デモ 死人じゃない、詩人よ。

デモは鞆から録音機を取り出す。

娘の目の前に差し出す。

娘 ナデスカ。

デモ 聞いてください。

娘 キキマセン。

デモ 聞いて。

娘 デモ、

デモ 先生の声がここに、

娘 デモ、

デモ 詩人の言葉がここに、

娘 デモ、

デモ でも、

娘 デモ、

デモ ロクデモないのは私です。

娘 ロク、デモ？

デモ デモ。それは反対のことばかりを思い続けていたころの私の名前です。

娘 デモ？

デモ 聞きなさい。独りの詩人が消えれば、独りの詩人が生まれる。これをくだらないと思えば
そうかもしれない。でも先生：まだ雨は止んでいません。ここも、ここから遠く離れた新しい
場所へ移っても、世界の均衡はあのころと同じように崩れたままです。先生。あなたが予想した
未来がここにあります。

雨の嵐はやがて、砲弾の嵐に変化しはじめる。

もともと、砲弾であったのに雨だと思いたかっただけかもしれない。

デモは、嵐が乗っかる指先で再生ボタンを押した。

「闇市では壊れ物が転がっている」

ザザザザザザア……

粗くてザラついた音。

録音機械から聴こえてくるのは、

「これは私の憶測で、

私の個人的実験。

それがナンの役に立つのかと言われ続けた結果。

医者不足のように分かりやすくはないから。

目に見える傷口をふさぐように分かりやすくはないから。

かわりに情操教育？

豊かな表現？

学力向上？

いいえ。

一番重要なことは、

世界情勢の均衡は、詩人によって保たれている。

これはあくまで、私の憶測……」

ぼそぼそと、記録用録音機械に向かって語り続ける、

セン・セイという名の先生。

娘とよく似ているが違う。

お腹が目立ってきている。

妊娠中期だろうか。

セン 一番重要なことは、世界情勢の均衡は詩人によって、詩人の言葉によって保たれているのだ。これはあくまで、私の個人的憶測。甘いですかこの考え。傾いた経済を、二度上がった北極の温度を、武装しはじめた国を、絶滅しかけた人種を、沈んだ大地を、引き上げるのは、詩人が朝日について考えるとき、夕暮れについて考えるとき、ニンゲンについて考えるとき。言葉の、その奥に広がる言葉になる前の言葉が、宇宙を連れてくる……夢見がちですかこの考え。理想ですかこの考え、

喧騒。

人の熱。

自転車のベル。

売り子の声。

どこかの市場。

センは道ゆく人を物色している。

もう一度、録音機を口元に。

セン 言葉が崩壊すれば意識も崩壊して秩序も崩壊して均衡が崩れた世界に必ず現れるのは正しい闇市である。言葉が飛び交う。人間が飛び交う。闇だからなんでもある、闇だから……人がそこにあふれる……溢れすぎだね……

手には玩具のようなもの。

振ると、音が出てバカバカしい感じがする。

セン 探すのである。溢れるここで。ビルのテップンから見下ろすやつらの中からじゃない。溢れるここで、探すので……ある……詩人度数60%。詩人度数45%。詩人度数38%。詩人度数16%。詩人度数55……

ぐるぐると、道行く人をストーカーしては、

そのばかげた玩具で度数を図る。

セン イマイチ。詩人度数7%。詩人度数12%。詩人度数9%、19%、2%、4%、うーん、マイナスイマイチ。

度数ばかりに目を向けていたセン、ふと足を止めた。

セン しまった。迷った。

ゆつくりと、辺りを見渡す。

そこには、無数の少女たちが転がっている。

セン ここは……？

また録音機を口元に当てて、

セン 闇だからなんでもある。闇だから、人が、転がってる……人が……この子たち……壊れた女の子、ばかり……？

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

突然、けたたましい音が鳴り響いて手元の玩具を見る。

セン 詩人度数…ひ、180、190、にひやく…越え…計測不能。計測不能。計測…

センは顔を上げる。

けたたましく鳴り続けている。

セン どこ？

足元の無数の少女たちをかき分ける。

けたたましく鳴り続けている。

セン どこ？ どこ？ ど…

センは、ひとりの少女を見つけた。

毛布に包まった少女。

けたたましく鳴り響いていた音はさらにけたたましく。

セン、玩具をその少女に近づけてみる。

と、けたたましく鳴っていた音が、最後にブラボオと華やいだ。

セン 詩人度数、計測、不能…

セン、ぐんにやりしたその惚けた少女の腕をつかんだ。

セン この子。捨てるつもりなら、私が責任を持って引き受けます。

ぼんやりと目を冷ました少女が、鳴いた。

獣のように。

「そこに見えるものは」

セン 全く、理解不可能でした。これは言葉じゃない。鳴き声です。咆哮です。集中して。耳を、傾ける。と。かすかな違いを感じ取れます。イエスの時と、ノーの時、咆哮は違います。他の微妙な感情も、キャッチするしかありません。問題は。彼女に私の言葉が、

少女、喚くのをやめてふとセンを見た。

セン ……届いて……………る？

セン 分かる……………？

センは見つめる。

低く、唸り続けながら、少女はふと空を見る。

つられて、センも見ろ。

飛行機雲、横切っていく。

セン あんた……………何か、見てるよね？

セン 何を見てるの？

少女、空を見て、かすかに笑った。

セン あんた……………壊れてない、ないね？ ねえ、あんた、何を見てるの？ 何を考えてる？ あんた自分が詩人度数180%、200越え、測定不可能、だって知ってる？ 分かる？ ね……………

ゆつくりと、少女に手を伸ばした。

が、

がぶり。

指先にかぶりつく。

振り払う、転がり起き上がってセンに突進する。

よける、ぶつかる、ころがる。

センは思わず少女の毛布を奪って被せる。

動物を捕獲するように。

モタモタと、ヨタヨタと、毛布の獣が動く。

それに再び玩具を向けてみるセン。

ブラボオ、鳴り響く。

セン 素質。詩人度数、180%。あるいは測定不可能。

今度は、それを自分に向けてみる。

いかにも残念的な音がする。

セン 素質。詩人度数20%…

今度は、落ち着いて。

というよりは、沈んでいる。

セン 諦め方が、分かんないわ。絶対、200%だと思っていたのに。

「思い込みのはじまりは取り返しがつかない」

17 先生。

17は、きりりと立って、しっかりと

17 先生。

窓から木漏れ日。

17 先生。

17の影が廊下に伸びる。

17 私、詩人になろうと思います。

もうひとつ、影が伸びる。

先生の影。

先生 し。

17 詩人。

夕方4時のチャイムになる。

先生 はい、国文学科、あたりの資料集めましょうか。

17 いえ。大学には行きません。

先生 あ。行かないの？

17 はい。

先生 家庭の事情？奨学金制度の資料あるわよ。

17 あ、そうじゃなくて、私、詩人になります。

先生 この短大ね、詩人の先生が非常勤講師やってて、

17 いいです。

先生 あ。いいの。

17 はい。詩人になるんで。

先生 …なるの？

17 はい。

先生 それどこに願書出すの？
17 出しません。
先生 筆記試験はいつあるの？
17 ありません。
先生 どの雑誌に掲載される予定なの？
17 予定は、ないです。
先生 いいと思う。いいと思うのね。
17 はい。ありがとうございます。
先生 うん、だからじっくり考えない？ じっくり。
17 決まってるんで。
先生 ところで三者面談なんだけど？
17 あ、昨日両親とやっちゃまいました。
先生 それって、
17 大喧嘩。
先生 あ、やっぱり。で、
17 勝手にしやがれて。
先生 あ、やっぱり。で、
17 勝手にした次第です。
先生 じゃおうちに電話して日を改めて、
17 先生。
先生 お母さんも一緒に、話しましょう。
17 先生。
先生 さん。
17 私。
先生 詩人になりたいのね。
17 いえ。
先生 いえ！？
17 なりたい、でなくて。
先生 どっち？
17 言い方、まづってました。
先生 正しくどうぞ。
17 私、詩人なんです。
先生 ……
17 もっと正しくは。詩人、だったんです。
先生 ……ところでそれは最近気付いたの？
17 はい。

先生　：ちなみにいつから詩人だったの？
17　たぶん。生まれたときから、じゃないでしょうか。
先生　：先生ね、生まれつき腸が人の二倍なの。それにともなって便秘がハンパないの。そういう生まれつきってこと？
17　はい。
先生　ん、先生ちよつと分かんないな。
17　先生は、生まれつき先生でしたか？
先生　んー…？
17　教員免許を取って、先生になったんですよね？
先生　そう、ね。
17　私は、生まれつき、詩人なんです。
先生　あ、そういうことだったら先生だってね、素質あったのよ、あったから先生になろうと思っただと思うのね。そう思うと生まれつき先生ね。あ、そう。そういう意味だったんだ。なりたいと思うのは、素質があるからだって、
17　そういうのとはちよつと違うんですよね。
先生　違う、の？
17　腸の例えのほうが、しつくりくる。
先生　いや例えじゃなくてホントに便秘ハンパないから。
17　だって、腸が二倍長くなる素質があったから、長くなりてえって願って、長くなったわけじゃないでしょう？
先生　腸が長くなりてえって願う人いる？
17　そう、そこなんです。
先生　そこ？
17　願うとか、願わないとか。じゃなくて。選ぶこともなくて、もう、それしかない、っていう。そういうの、なんて言えればいいですか？
先生　う、まれつき。
17　ですよね。
先生　こだわるようだけど、腸はね。
17　はい。
先生　遺伝なのね。母方の祖父が同じように長くて、人の3倍。詩人っていうのも、遺伝的ななんか？
17　違うと思います。
先生　じゃあ、何？
17　…運命？
先生　（イタイ、眉間イタイ）
17　弱いな…宿命です。

先生 分かった。そこまで言うなら。先生、応援する。

17 はい。応援してもらわなくても、もう今詩人なんで。

先生 …あそう。じゃあ…ちよつとだけ見せてもらえない？

17 はい？

先生 その、詩？ ポエム？

17 は？

先生 書いてるんでしょ？

17 いえ。

先生 いーえ！？

17 最近気付いたところなんで。

先生 書こう。ね、とりあえず書いてみよう。で、あ、違うな…って思ったら、また三者面談しない？

17 書くんじゃないんです。つかむんです。

先生 ん、先生ちよつと詩人の定義がわからなくなってきた。

17 たぶん。世界情勢の均衡は、詩人が保っているんだと思うんです。

先生 ……はっ！

17 たぶん。人間を考えるのが、詩人じゃないかって。

先生 人間考えるのは詩人だけじゃないでしょ。もつと…ばいあるでしょ。パン屋だって人間を考えているのよ？

17 言葉で考えるのが詩人なんです。

先生 小説は違うの？ 戯曲は違うの？ やっぱ先生、詩人の定義が、

17 詩……って、練習してうまくなるもんじゃないんです。生まれついたもの。

先生 それどつからのインフォなの？

17 空から……

先生 およしなさい、そのポーズをしていいのはラオウだけよ。

17 今ごろになつて気付くなんて。私、隠れ詩人だったんです。

先生 隠れキャラみたいな感じに受け取っていいのかな？

17 気づけばいいだけだったんです。みんな気づけばいいのに。良かった。気づかず一生過ごすところでした。先生とかお母さんが何言つても、これ生まれつきなんで変わりませんから。もういいですか。かなり時間押してますよね。次、園田さんかな？ 待つてるんじゃないですか？

先生 あのね。流れ作業じゃないの面談って。これから先のご相談なの。

17 先生、イタイこと言うなつて。思つてるんでしょ。

17 そうね思つてないわよ。ただ現実的に、

17 ゲンジツ。

先生 先の話つて、だから、その、どう生きていくのか、つてことに繋がるじゃない。

17 ああ、日銭の話ですか。

先生 ひ、

17 食べていけるのかってことですよね？

先生 ……そう、ね。詩人だってイキナリ言ってみたところで、

17 バイトします。

先生 そうなるでしょ。

17 気付いちちゃったんで。周りに合わせて自分じゃないものになるなんて耐え難いです。

先生 いや、いいのよ、詩人になりたいならそれで。だから、この短大に詩人の先生がいるから、ほら、いろいろ聞いたりして、

17 やりたいことあるんで。

先生 うん、いいのよ、やればいいのよ、やりたいことは。大学行くか就職して。

17 卒業したら、詩人として旅に出ます。

先生 は。

17 言葉を、探しに行きます。

先生 ……どこに？

17 どこにでも。

先生 探してどうするの？

17 黄金の詩人を目指します。

先生 ……はっ！

先生、頭を抱える。

先生 そう、じゃあ、いってらっしゃい。

17 はい！ 行って来ます。

「戦場の詩人」

どこでも銃撃戦。

飛び交う、弾丸。

ひゅんひゅん。

防弾するものなど一切持たない、

研修生が弾丸の前に飛び出して、叫ぶ。

研修生 ニンゲンのお、叫ぶ、言葉はあ、弾丸のようにい、

先輩が飛び出して、

先輩 バッカ！ 伏せろ伏せろ。頭飛ばされたいのか！？

ガバっと、ふたりは腹ばいになった。

研修生 先輩！ 伏せて隠れてる場合じゃありません！ ニンゲンのお、

と、また立ち上がるようにするが、

先輩 おおっと、落ち着け落ち着け意気込みは買うけど。

研修生 買いますか！？ 買えるほどの意気込みありますか！ じゃもう弾丸とか全然怖くないっすね。弾き飛ばせる気合おかわりいきますか！？

先輩 おお、おお、だから落ち着け。興奮しすぎていいことひとつもないから。

研修生 興奮しなきゃ詩人じゃないっすよ！ 先輩、一発ヤツラにかましてやってくださいよ。

先輩 ん？

研修生 え？

先輩 かます武器はこっちの手元じゃないヨ？

研修生 は、何言ってるんすか、自分たちの武器は言葉じゃないすか。ここは一発ドカんと、

先輩 え、何言ってるんの？

研修生 え、何って、何！？

先輩 だって、山田くん(仮)、これはデモンストレーションじゃないよ。飛び交ってるのは実弾だよ？

研修生 いや、だから…。だからじゃないすか。先輩、黄金の詩人の言葉は、どんなものにも打ち勝つって！ 詩人の言葉の奥には広がり続ける言葉になるまえの言葉の宇宙。言葉を磨いて、尖らせて、時に弾丸を跳ね返す武器になり、はらりと舞い落ちる花びらのように何十にも積み重

ね、時に体を包むクッションのようになり、またある時は熱い甲子園球児が投げるストレートのように。心臓に投げ込めば命を吹き返らせる電気ショックだと、先輩、話してくれたじゃないすか。今、それを、やるべきっすよ。

ガガガガガガ

銃撃戦はやまない。

先輩 ……そうだよ。

研修生 ですよね!?

先輩 そうあるべきなんだよ。

研修生 なんですすよね!?! おーし、行くかあ!

先輩 でもね山田くん(仮)。

研修生 ハイ!

先輩 君、黄金の詩人じゃないからサ。君の言葉じゃ実弾飛び交いっばなしだよ?

研修生 ナニブン、まだ研修っすからね…

先輩 知ってる? 実弾って当たると、痛いんだよね。

研修生 あ、たった。こと、あるんすか?

先輩 うん。研修中にね。かましてやろうと、飛び出してね。さっきの君みたいに。でね、ココ

研修生 ドタマ、直撃…すか…

先輩 まだね。あるよ。ここに。めりこんだ弾丸。みんな同じことやっちゃうよね。

ガガガガガガガガガガガガガガ

研修生 あ。分かった。先輩、そんな話しても、自分、絶対、ヒよりませんから。

ガガガ

研修生 言葉は弾丸で、

ガガガ

研修生 言葉は花びらで、

ガガガ

研修生 言葉は宇宙だって、

ガガガ

研修生 先輩から教わったんすよね。

ガガガ

ガガガ

ガガガガガガガガガ

研修生は銃撃戦の真ん中へ歩いていく。

丸腰、唇に言葉。

研修生 ニンゲンのお 叫ぶ言葉はあ、弾丸のようにい、放物線をお、描く。狙いを定める、今、そこへ、届け…

銃撃戦は、止む事はない。

研修生のすぐそばに弾丸の軌道。

研修生からそれて、その弾丸は、

研修生 ……！

先輩を直撃する。

ゆっくり、倒れて。

先輩は動かなくなる。

研修生 ……せんばい…

反応はない。

研修生 ……大丈夫、ですか…？

反応はない。

研修生 一発、かましてやってくださいよ…

反応はない。

研修生 自分たちの武器は、言葉じゃないすか…

反応はない。

研修生 大丈夫…？

研修生は何か気がつく。

研修生 …あ。

言葉が武器に打ち勝つことなど理想だと、気がつくのかもしれない。

研修生 届いとらん。

銃撃戦は、やまない。

飛び交い続ける。

研修生、ふと顔をあげた。

その瞬間に、

弾丸と暗闇がやってきた。

「寿命と弾丸」

カキン、

と、ひとつの弾丸が頭蓋骨にめり込んだレントゲン写真

医者 ああ、バツチリ与ってる。もう漫画だね。超ウケる。ヤッバイかなりヤバイテンションあるね。あ、違和感とかありますか？

セン え、あ、違和感、は、特に。

医者 なんで？ なんで生きてられんの。これすげくない？

セン あ、あの、先生、私、大丈夫なんでしょうか？

医者 あ、うん、とりあえずね。まそのー前頭葉の横つちよにね、まそのールパン三世のアニメの始まり知ってる？ ふーじこちゃんが口紅入れて撃つじゃない？ それが、ルパンのンにカッインってぶち込まれるまあのーオープンング？

セン ダメですよね。

医者 普通はね。

セン マジか。

医者 でもまそのいろいろ検査したけど今のところはとりあえず安心、

セン ああ……

医者 できないね。

セン え。

医者 時限爆弾を体に抱えたまま生きている。

セン 時限爆弾って、カチコチ数字が減っていくあれですよ？

医者 え、他に違うタイプのもつてある？

セン 始まりの数字が分かっているヤツですよ。

医者 爆弾犯人がセットするとき大概30分が多いね。

セン 頭の……中で……爆発……するんですか……？

医者 いつかね。

セン いつ？

セン 分かんないね。

セン さっさと取り出せ！

医者 ブラックジャックじゃなきゃ無理だよ！

セン じゃあじゃあ私の、残り時間のセットは、

医者 明日かもしれないし100年後かもしれない。

セン かもしれない、じゃなくて！

医者 だってそんなの私がセットしたわけじゃないし！

セン 誰がセットしたんですか！

医者 そんなの神のみぞ知るだよ！

セン、突然黙り込んだ。

医者 え。大丈夫？

セン ……あれ？ でもそれって誰でも同じですよ？

医者 普通、人間の頭にタマは入ってないよ……

セン でも見えちゃったからですよ？ だから、いつか爆発する、いつかオマエは終わる……

医者 そつ、そんなヒドイ言い方してない、してないよ？ 穏便にね、あのね、医師不適合鑑定とかに報告しちゃだからね。

セン いえ、あの、誰だって限りと終りはありますよね？ ただ弾丸はレントゲンにうつるから。

終りの原因が目に見えると残りの命をカウントダウンし始めるって、それだけのことですよね？

医者 まそのーそれが医学？

セン でも人間って生まれた瞬間からカウントダウンは始まっていますよね？

医者 やだ、悲観的。

セン いいえ。良かった。

医者 え？

セン うん、それで良い。生き物ならなんだって、カチコチ、数字は減ってるから……見えると焦っちゃって、でも、うん、もう大丈夫です。

医者 すげい、楽観的。

セン はい。

医者 痛み止め出すけど乱射しないでね。

セン はい。

医者 こういう状況だと闇市で出回りやすくて、クセになってハイジンになる人続出だから。

セン はい。

医者 じゃ検閲寄って帰って。

セン はい？

医者 詩人の査定があるから。

セン は？

医者 君、戦場帰りの詩人でしょ？

セン はい……

医者 内地の詩人の査定はもう終了したから。

セン 査定？

医者 そ。

セン ……ちょよ、やめてよ、ちょっと、こん、こんなので、何が、私の、何が、何が、

と、詩人度数を図る玩具を役人から巻き上げる。

残念な音が始終なり続ける。

セン あー……うるさい！ ニンゲンが人間を査定してんじゃないよ！

役人 査定は人間がするものですよ。

セン ガアッ！ 自分が詩人と思ったら詩人なんだ……

役人 そのように。

セン え？

役人 誰でも詩人と名乗れば、結果水準は下がりますので。おわかりいただけますか。世界のフランスのために一定の人数が必要です。が、80%以下の方が繰り上がることはございません。これが、新しい世界の基準です。もうよろしいですか。

セン ……100%は？

役人 はい？

セン じゃあ、100%の詩人の、言葉は、どんなのが100%!? そらんじてみなさいよ。

役人 %&リく\$5“3###!”(& , ||く%& ‘ ||く& ,

セン は、何言ってるの!? 全然分からないんだけど？

役人 これからの共通語です。旧式の言葉はもう消えてなくなるでしょう。ですから、

セン ……

役人 少なくとも共通語を扱えなければ。

セン イキナリそんなこと言われたって、

役人 世界はめまぐるしく変化しておりますので。

セン ……………ついていけない。

役人 はい。高速で進んでおります。では。

役人は笛を吹いた。

P i

重い鉄の扉が閉まる音。

センはその扉の中には入れない。

セン 詩人専用入り口…

セン なんも……分かってない。新しい言葉じゃなきゃ詩人になれないなんてありえない。はあ？ きょーつーご？ はあああああ？ 詩人の、本当の、言葉は……言葉になる前の言葉だから、どんな言葉だつてかまやしないのに、全然、分かって……

しかし、詩人の入り口に背を向けて、

セン …バイトさがそ。

一歩、歩く。

セン かまやしないわよ。そんなもん。選ばれた奴らで勝手に線引きして勝手にやったりやいのよ。私の頭はここにあるんだから、いつだって、どこだって、考えることは出来るんだし。

一歩歩く。

セン …20%の、私が…?

頭をふる。

セン 違う。あんなもんになにが…

一歩歩く。

セン ……気にしなきゃいいのに…

一歩歩く。

セン 言葉で言われると……ばかばかしいのに……重た……い、た。

弾丸が埋まっている頭を押さえる。

ひゅーん、と、弾丸が飛び交う。

セン、空を見上げた。

セン ……戦車? また始まった…

空には戦闘機。

爆撃と爆音。

「世界の均衡は誰が握っているのか」

飛び交う銃弾。

二人の覆面政治家。

地球を支えながら。

R また始まつちやつたじゃないですか！

S そだね。

R 新しい時代に突入したのに。

S だからじゃない？

R あんなに整理整頓したのに。必要なところへ、必要な予算と、適材適所。均衡を保つために。

S 人材不足なんじゃないの？

R だから色んな部署を査定したじゃないですか。

S そんなすぐに効果でないもんだよ？

R あらゆるパーセンテージ、緻密な計算の上に成り立ってるんですよ？

S って、エライ人が言ってた。

R おい、お前だろうが。

S あ、またバランス崩れた。

R あ、こつちも。

S こつちでも。

R 何が足りないんでしょうか。

S 誰か有能な人が解決してくれないかなあ。

R あのね…これアナタの仕事でしょうが。

S 違うよ。みんなで力を合わせるんだよお。

R ニヤニヤしながら言わないでください。

S やーどうせこの星もう沈むだけだしさあ。

R やや、この部署、随分人数が足りませんね。

S え、どれ？ 詩人？ 定数、割ってるね。

R まだ認定を受けていない人がいるんじゃないですかね。

S バランス悪い部署だなあ、少なすぎ。

R …これ偶然でしょうか？

S えなになに？

R ここ、この地区、詩人80%以上が一人もいません。

S ああ、荒れ放題の地区ね。

R こちらも。ああ、こちらも、こちらも。偶然でしょうか？

S えそれって、詩人が一人もいないから荒れるってこと？

- R 偶然ですかね。
- S 詩人ってそんな力ある？ ていうか詩人って何？ 知らないけど。知ってる？
- R 小学校の授業で感じたこそばゆい思い出くらいしかないです。
- S 教室の片隅で喋らない女子がノートに書き溜めているみたいないメージ。
- R あ、そうそう。
- S なに？
- R 小説とか文章って毎日書いて書いて書きまくとそれなりに上手くなるらしいです。
- S 今は詩人の話をしているんだけどねチミイ。
- R や、だから、文章は練習すると上手くなるけど詩は、
- S うん。
- R 練習したところで、なんだそうです。
- S なにそれ。
- R 詩人こそ、持って生まれたものらしいです。
- S え、なにそれ生まれつきってこと？
- R 生まれつきと言っているのなら、ですが。
- S あ、こっちの地区も詩人80%以上が一人もいません。
- R こっちも荒れ放題ですね。
- S ……偶然？
- R どうでしょうか。
- S ていうかさ詩人って何？ 知らないけど、知ってる？
- R 話がループしますがよろしいでしょうか。
- S いんや。これからホワイトハウスに遊びに行くからここで打ち切りだ。
- R はい。
- S 冷静に考えりやさ詩人がいようがいまいが、荒れる荒れないって関係ないよね。だってさ、荒れてない世界がこの有史以来、今まであった試しないじゃん。
- R あっ。
- S なに？
- R この地区、またジャンキーがひとり増えました。
- S えーやだーもう知らなーい。

銃弾は、止まない。

「日常の何も考えない快樂」

覆面政治家たちが指さした地区。

飛び交う弾丸の日常。

毛布を持った少女、デモが歩いてくる。

片手に銃を持って、もう片手には毛布。

ライナスの毛布のように、産着のように、いつもそばにある。

デモは銃をこめかみに当てた。

ズガン。ふつとぶ。転がるデモ。

死にはしない。楽しそうに、なんとも言えない、声をあげる。

それを見下ろす、ディーラーのD。

D すげえいいよコレ。って言う前に使っちゃったねえ。

デモ でもすげえ高いんだよね？

D いやもう使っちゃったしねえ。

デモ でもお試しセットとかになんない？

D 商売だかんねえ。

デモ でもいいやもう一個ゲット。

D 君ガラクタだねえ。

デモ あー…

D 最近流行ってるもんねえ。

デモ うー…ん。

D ハマったら蓄積されていくんだけどねえ。

デモ あそー。

D ぶち込んだぶんだけ頭グザグザになるんだけどねえ。

デモ へー…

D ねえ、払う気ある？ 実家に請求しちゃうよ？

デモ でもタロット占いで誕生日カードが、悪魔なの。

D はい、サインここねえ。

デモ でも悪い習慣にハマりやすい注意って、書いてあるの。

D 打ちまくってるもんねえ。

デモ でもなんも考えないだけだもん。

D それって意外と難しいことだよねえ。

デモ でもサインここか。

D はいはい、そうそう。

デモ でも悪いことじゃないもん。

D 悪くないよ正当だよ。現金で支払えないなら君を売っばらうって契約書だからね。

デモ でも他にすることないからしょうがないんだなあ。

D じゃ最後のひとつこ置いとくねえ。

デモ でもありがと。

D はい、サインどうも。

デモ あーでも…死ぬまでこうしてたい。

ズカン。

デモ いい。

ズガン。

デモ いい。

ズガンと打ち抜いて、あられもない声をあげるデモ。

D 打ってばかりじゃそのうち死んじゃうよ？

デモ でもお、

D 気持ちイ？

デモ いい。

D 楽しそうな日常だねえ。

デモ うん、いい。

D 何にも考えないのはウラヤマシイ、けど、死人だねえ。

デモ シ、じん？

D しにん。

デモ でも生きてるもん。

D かろうじてね。心痛まないわけじゃないんだよ、でもこっちにも生活あるからね。はいどうも毎度あり。

ディーラーは姿を消す。

デモ でもお、しょうがないしいでもお、どうでもいいしいでもおでもおでもおおほほほほほほほほほほほほほほほほ…どおおおでもいいの…頭が…うるさい…なんで…？ 地面が冷たい…なんで…？ でもあたしの…指は熱い…なんで…？ なんで？ 吸い込ん

だ空気が……冷たい……なんで……なんで生きちゃうんだろう……空が、高い……

デモは毛布に包まった。

デモ あ、戦車。振動。冷たい地面から、振動。戦車の……振動。まだ終わんないのかな。もう終わったのかな。あ、また始まったのか……な？　なんで？　いつまでも、なんで？　終わらない……空は……こんなに着いの……空は……いつも……

デモ、空に向かって両手を広げた。

どこに向かって、なにに向かって言っているのか、
誰にもわからない。

デモ 元気？　そっちは？　静か？　元気い……？

デモ、突然腕を捕まれた。

セン この子。捨てるつもりなら、私が責任を持って引き受けます。

「見込みのない詩人希望者と、絶望の素質者その1」

咆哮ばかりするデモ。

それと格闘するお腹が大きいセン・セイ。

それらの声が、現在の録音機械から聞こえる。

流れ聞こえてくる格闘は時々ばかばかしい。

デモ およそ人間らしくない姿でした。たぶん。あの頃の私は。

カチリ、とひとつめの録音機械が終わりを告げた。

紅茶の香りがして、

ふと顔をあげると、セン・セイではなく。

娘がいる。

デモの目の前に置かれた、紅茶。

娘はデモをもてなす気はあるようだ。

デモ あ…どうも。ありがとうございます。

カップに口をつけたが、噴出す。

豪快に。

浴びる娘。

デモ ごめ、んな、さい、珈琲か紅茶かと思ったら、

娘 モンダイナイデス。

デモ 醤油のお湯割りだったんだ…

娘 モンダイナイデス。

デモ …いただきます…

娘 ブッシ、ブソク。

窓の外は、砲弾の嵐。

デモ あ、ああ、仕方ないですね。

娘 ソレ…

デモ え？

娘 ナニカ、ノ、

デモ え、何ですか？

娘 ナニカ、ノ、マジマイ、デス、ケ？

デモはカップを持ちながら、奇妙な動きを繰り返す。

それはパンチドランカーのように手が震えたり、

船酔いのような足元だったり、飲もうとするのに飲めない口元だったりする。

デモ あ。昔、無茶やっていたころの後遺症です。お気遣いなく。そのうち治まります。

娘 ア……キュウシガイチ、デ、タマニ、

デモ 見かけるでしょ？ 身体に蓄積された快樂が抜け切れなくてたまに動き出すんです。

娘 カイ、ラク？

デモ ええ。快樂。何も考えない、快樂。

娘 ドウリデ。

デモ はい？

娘 タノシソ、デス。

デモ 違います。

娘 ウツ。

デモ これでも、

娘 ハッ。

デモ 逃げてるんです。あの、ころの、

娘 ウツ。

デモ じぶん、か、ら、

娘 ハッ

娘 ソレハソレハズイブン ト タノシ、

デモ くないから。無意識に。身体が。また、捕まらないように。逃げる、

娘 ドウ、ナリマスカ？

デモ 捕まったら？

娘 アイ。

デモは、指を伸ばして、

デモ こおなる。

次の録音の再生ボタンを押そうとする。

デモ どうなるか 続きが、ここに…

始まりのボタンを押したいのに、

デモ あ。

うまく指がそこへたどり着かない。

デモ あ。

人差し指を突き出して、

デモ あ。

豪快に、あちこちを、指差す。

娘 ワザ、ト？

デモ 違います、すみません、かわりに再生押ししてもらえますか？

娘は、録音機械に手を伸ばして、

デモ その赤いボタンを…、

ゴロンと、投げ捨てた。

デモ ！

デモの後遺症はまだ治まらない。

娘は無言で床に転がった録音機械を見つめた。

デモ あの、続きを、

娘 ゴツツアングス。

デモ は？

娘は後遺症によって踊るデモを冷ややかに見る。

ただたどしいこちらの言葉を使うのをやめて、

娘 お腹いっぱいだって言ったの。母は詩人度数20%だったようだけど、だったら母親度数は

皆無だわ。続き？ 先生度数は何パーセントだったのかを聞かせたいの？ いらないんですけど別に。0%ならやつぱりがつくりくるだけで、100%なら腹立たしい。だってそれならあなたに100%注がれたわけだから。

デモの後遺症は激しくなる。

デモには娘の言葉は早口すぎて理解しづらい。

娘 明日にはあっちの寄宿舎に帰るの。この星にはなんにもないから。物資不足。ガラクタばかり。灰色の街ばかり。新しい土地へ行けなかった人たちがばかり。醤油のお湯割りでもごめんなさい。詩人不足？ 80%以上の詩人が集まったらこの砲弾の雨が止むってわけ？ 馬鹿げたニュースよりもブドウ糖をちょうだいって感じ。言葉言葉言葉どうでもいいわ。だって、今ほら、届いてないじゃない。

カチ、とデモの指がボタンを押す。

デモ あ。

デモ 治まった。すみません。早口だとそっちの言葉聞き取れなくて、あの、なんて？

ザザザザザザア……と、動き出す録音機械。

娘はにっこり微笑んで、

娘 イエ。ベツニ。

ザザザザザザア。

娘 アナタ、ニ。ハハ、ハ、ナニ、オシエタ、デス、カ？

デモ ……未来。と。

娘 ト？

デモ 絶望。

ザザザザザザア。

録音機械から、咆哮。

「見込みのない詩人希望者と、絶望の素質者その2」

セン どこ？ 隠れてないで、出てきなさい。

さささ、と動く影。

気配を感じてセンは振り向くが、どこにもいない。

さささ、と動く影。

振り返る、

さささ、

振り返る、

さささ、

振り返る、

ギャン！

と、ケモノの泣き声のよう。

セン なかった！

センは何か、ヒモのようなものを引っ張る。

と、足首から逆さに吊り上げられるデモ。

嫌がる叫び声。

暴れるほど、足首に食い込む。

センの側にはいつでも録音機械がある。

セン こんにちは。

繰り返す。

セン こんにちは。

繰り返す。

セン こんにちは。

デモは答えず、ただ咆哮のみ。

センとデモの毎日は記録される。

日常の音、会話が、その録音機械に封じ込められる。

郵便屋の音、自転車のベル、犬の鳴き声、戦闘機が横切る。

機関銃の音が、絶え間なく。

その中から、ドアの音。

足音。

ひとりの男の声。

男 君は壊れてるよ。

センはひたすらデモに言葉を教え続ける。

「こんにちは」

男の声が聞こえなかったわけではないが、

男 誰も詩人の君を望んでいない。

ひたすらデモに向かうセン。

男 新しい土地を開拓するのに、夢と希望を語る言葉が必要なのはよく分かる。でもそれはもう、詩人協会がやろうとしている。素人の君があがいたところで、

男 それは、なんていうのかな、君の、自己満足だよ。

ギャン、とデモが泣いたかもしれない。

セン 挨拶はハロウ。挨拶はグッドバイ。世界は繋がっているから。このふたつさえあればいい。

男 今の、この状況わかってるのか？

セン 人間をあらわす言葉は、

男 いつまでも止まないんだぞこれは。

セン 挨拶はハロウ。挨拶はグッドバイ。

男 なあ……産む気あるのか？

セン あるわよ！

男 だったらちゃんとかつちを見ろ。

センはゆっくり男を見た。

男 荷物をまとめめて。今日の最終便のチケットが2枚、

セン あなたこそ見て。

窓の外は砲弾の嵐。

セン 詩人が必要なのはこういうところなの。並んだ棺の前で考えることなの。朝いつものように目が覚めるかを考えることなの。

男 君は詩人度数20パーセントなんだろう？

セン 私じゃなくて、

男 その子？ 言葉もロクに喋れないのに？ 自分の20パーセントは信じないくせに矛盾してる。数字なんて人間が勝手につけただけと言う君が、200パーセントは信じるのか。そこだけは基準に従うのか。都合がいいな。だったら基準を受け入れてちゃんと諦めたらどうだ。

セン ……探してるのよ。

男 なにを？

センは言葉を探すが、

男 言いたくないのか、ただ答えられないだけか……もういい。だけどそのお腹はどうする？

セン だから、産むって、

男 もう荒れていくだけのことで？

セン どこだって人間がいるならいつか荒れるわ。

男 そんな誰かの話じゃなくて、僕と、君の、当たり前前の生活の話をしたいのに。

二人のやりとりを見て、デモが咆哮した。

男 僕が疑問なのは、どうやって教えるつもり？ 詩人度数20%の君が。

男は大きいため息をつく。

男 君は、とりつかれてるよ。君は壊れてる。

センは黙ったまま。

男 生まれたら僕が引き取る。新しい星でこちらの生活をするよ。

扉は勢いよく閉められた。

そのせいか、デモをつるし上げていたヒモは千切れる。

床に、ゴロンと落ちるデモ。

ギャン、と泣き声をあげる。

セン ……いたい。

埋もれた弾丸、痛みが走る。

センは録音機械を巻き戻して聞く。

「どうやって教えるつもり？ 詩人度数20%の君が。」

巻き戻して、また聞く。

「どうやって教えるつもり？ 詩人度数20%の君が。」

巻き戻して、また聞く。

「どうやって教えるつもり？ 詩人度数20%の君が。」

巻き戻して、また聞こうとするが、やめる。

ふと気がつくとき、デモがゴソゴソと何かを探っている。

セン だめよ。

デモの手には、銃。

セン それは私の痛み止めなんだから、

その手を振り払って、デモは快楽を求めるのだ。

セン やめなさい。

と言うセンをひつつかもうとする。

セン やめなさい！

取ろうとするデモと、止めようとするセンが

取っ組み合いになる。

引っ掻く、引っ張る、

デモの力で引きずりまわされてもセンはやめない。

延々と続く取っ組み合い。

セン そんなものに頼るのはやめなさい。本当に何も考えられなくなるから、

デモが大きく口を開けて、センの腕を噛んだ。

セン つつい！

センは腕を引っ込めることはせずに、反対にデモの口に押し込む。

デモ !

デモの頭を窓のほうへ向けて。

セン 見て。

窓の外には夜空。

セン 20%の私が出ることもなんかが知れている。けどそこに月があることは教えられない。太陽が昇ると朝がやってくることは教えられる。その言葉くらいは教えられる。あなたは何を考える？ 200%？ 数字じゃない。計られてたまるか。見えたからよ。言葉になる前の言葉。私を見る目のそこに、奥に、渦巻くこれは嵐。計り知れない……

月が見える。

セン 見なさい。あれと同じ。空、月、雲、あなたの中にもある、それが私には見える。

それを横切る、戦闘機。

セン もうすぐ新しい星へ移動する。ここは荒れて誰も住まなくなつて、そのうち忘れさられる。100年後にはあったことさえ忘れられる。だけど、今何を考える？ 可能性の星、まだ誰にも荒らされぬ星、まだ何でもない星、まだ成長過程でもない星、私たちは宇宙。ちりと埃、それっぽっち。だから私は嫉妬よりも、希望を抱くのよ。

デモはセンを思い切り突き飛ばして、

快樂の銃を手取る。

こめかみに当てて。

お互いに、息をのむ。

時間は、現在のデモと重なる。

デモ その時は、先生の言葉は分からなかった。

セン 先生。今更分かったことがあります。

デモ こめかみに当たる快感のことしか分からなかった。

セン 私は、文字を、言葉を、ましてや作品を、残したかったわけではありません。貧弱ながらも印刷物活字電気の手で残すことは可能でしょう、が。

デモ 引き金を引くのをためらったのは、

セン 先生、今更気付いたことがあります。

デモ 不思議だったから。

セン 私は、きつと、弾をこめたかったです。

デモ なんて先生はこんな私のそばにいてくれるんだろう。

センは指を突き立てて、デモに向ける。

セン 私の頭蓋骨の隙間に入り込んで、今もまだここにある、命を蝕む時限爆弾となった弾丸のように。

センは見えない弾丸をこめる。

セン 撃たれる。言葉に。

センは見えない引き金を引くだろうか。

デモ でも先生。その弾は見えなかった。

セン だからこそ。

デモ でも先生。言った瞬間に消えた。

セン だからこそ。

デモ でも先生。撃たれたことさえ、私は忘れるかもしれない。

セン だからこそよ。

デモ 教えて先生。100年後には消えてなくなるのに、なんで私はあがいているんだろう？

センは、デモの手から快樂の銃を取った。

セン ご飯にしましょう。

「荒れ始めた故郷でも、人の営みはある」

ゆっくり、センとデモの日常が動き出す。
食事は人間の営み。

朝、目が覚めて、身支度を整えて朝食を取る。

本を開き、昼食を取り、買い物をして、また本を開く。

髪を洗って、夕食をすませ、空を眺めてベッドに入る。

センの大きなお腹はやがてポロリと取れて、

産着に包まれて、抱っこしているのは、デモ。

いくぶんマシになった顔つきで。

扉が開いて、薄暗い部屋を明るく照らす。

長身の男の影が見える。

セン どうぞ。生まれたら引き取る約束だったものね。

セン その子も連れて行ってください。大丈夫。数字が好きなら満足するでしょうよ。
200%なんて、誰もが驚くわ。詩人協会が学校も用意してくれるって。分かりやすい人たち。

センは産着に包まれた赤子を見た。

セン ここにも詩人がいた。言葉はなくても、ずっと考え続けているんだからね。言葉になる前の言葉……誰も彼も、それを忘れてしまおうけれど。

今度は、デモを見た。

セン 忘れてはだめよ。でももし忘れたとしても大丈夫。いつか動き出すから。私が、ちゃんと
撃ち抜いたからね。

センはくるりと背中を向けた。

デモ せんせ……

セン 行きなさい。

デモと、デモに抱かれた娘は男に促されるようにして扉へと向かう。
が、戸口でピタリと足を止め、振り返りセンのもとへ走り寄る。

デモ あいさつはおひさまあいさつはおつきさま……

ずっと持っていたライナスの毛布をセンに渡すと、センのもとを去る。
ひとり残されたセンは毛布を握りしめ、最後の録音機械のボタンを押した。

セン ……挨拶はハロー……挨拶はグッドバイ。

セン 考えなさい。嘆く前に悲しむ前に快樂に攫われる前に。並んだ棺の前で足掻きなさい。世界から忘れ去られたところで考えるのが、

セン、弾丸が体の中で動いて痛みにもうずくまった。

セン 痛い……

震える手で痛み止めを探す。

セン 痛い痛い痛い痛い……

痛みにもがく。

セン 痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い……

痛み止めの銃をこめかみに当てた。

セン だから、痛い、いつか、痛い、オマエは爆発する、痛い、いつかオマエは終わる……痛い。

引き金を弾こうか、迷う。

セン ぶち込んだぶんだけ頭グザグザになる、けど……痛い痛い痛い痛い……！

デモが置いていったライナスの毛布。

セン 考えたいのに、もっと考えたいのにね、痛い……

セン 人間の言葉を忘れても考えられるのかな。

セン あの子みたいにな、出来るはず、なのになりたい。

セン できない痛いできない痛いできない、のは……どうせ……無理、なのは……

セン 諦めているのは私だから。

セン だから20パーセント……？ 違う……

セン そうか……ああ、そうだね。測定不能は宇宙と同じだ……

セン 私が宇宙に、自分で、限界を作ったんだ。

そつとデモの毛布を離した。

セン 私は何だったのか。私が知りたい。

セン、目を閉じて、
ガン。

引き金を引いた。

砲弾の音だけがする。

そこにはもう誰もいない。

部屋に残されたのは、録音機械だけ。

ただ、砲弾の音を録音する。

やがて。

ずいぶんと、時間だけが過ぎて、

卒業証書を手にしたデモが戻ってくる。

誰もいない部屋を見渡す。

デモは、残された録音機械に手を伸ばした。

巻き戻して再生する。

「私は何だったのか。私が知りたい」

巻き戻す。再生する。

「私は何だったのか。私が知りたい」

巻き戻す。再生する。

「私は何だったのか。私が知りたい」

巻き戻す……

「詩人の旗を掲げる」

カチリ。

時間は現在へと戻る。

デモ でも。

デモ 私は詩人にはなりませんでした。なりたいたも思わなかった。なぜだか分かりますか？

娘 オワリ、デス。ネ。

デモ 分かりますか？

娘 ドゾ、オカエリ。クダセ。

デモ 分かりますか？

娘 ドデモ、イデス。ネ。サイゴマデ、ツキアイ、マシタ。ジンギ、トオシ、マシタ。ネ。

デモ 負けてはいない。ロクデモなくない。役に立たないなんてことはない。

娘 ナニイッテルカ。

デモ え？

娘 コノヒト。ワタシ、ヒキトツタトキ、モウ、ヒドイ、チュウドク。

デモ …え？

娘 イタミドメ、ランシヤ、ヨクアル。

デモ、棺を見た。

娘 ソレデ、オマエ、シジン、ナイナラ、コノヒト、ナンノ、ジンセイ？ イミナイ、ロクデナ

イ、バカトチガウカ。

デモ 馬鹿じゃない。

娘 ジャ、ナン、ダ？

デモ 詩人よ。

娘 ハッ。

デモ 誰に認められなくても。

娘 コノヒト、シジンナイデス。ショウコ、ドコアル？

デモ 5時24分。

娘 アイ？

デモ 目が覚めました。同時に、私は詩人なんだと思ったんです。あの時の先生の言葉が、動き始めた。

娘 ゴジ、ニジユウ、ヨン。

デモ 先生はいつお亡くなりになったんでしょうか？

娘 アケガタ。

デモ 時間は？

娘 イシャ、イツタ。ゴジ、ニジュウヨン、フン。ゴリンジュウ、ダス。

デモ 一人の詩人が死ねば一人の詩人が生まれる。先生が、紛れもない詩人だった証拠が私です。

娘 …オメデタイ。

デモ かもしれません。

娘 ワタシ、モウ、カエリマス。アト、ソウギヤ、ヤツテクレル。

デモ もう少し、棺の前にもいいでしょうか？

娘 スキニシロ。

砲弾の音がして、

デモ また…：

娘 ドコデモ イツシヨ。ホウダンノ アラシ。

デモ これが日常だものね。気をつけて。

デモはふと考えて、

デモ キヲ、ツケテ。サヨウナラ。

娘 最後に、挨拶をこっちの言葉でしてくれてありがとう。

娘は扉をあけて、

娘 オマエ、

デモ はい？

娘 ワタシキキタイ。ハハ、ノ、センセイ、ドスウ、ハ？ パーセンテージ？

デモ そんなの…：

娘 イヤ、ヤパリ、イラナイ。

娘は扉を閉めた。

デモ 計れないわ。

デモは棺にかけてある毛布を見る。
それを手にとる。

デモの手が、震える。

また、後遺症が出始めた。

快樂から逃れるように、デモの身体は動く。

デモ 考えるわ。先生。止まったら捕まってしまうから。考えるわ。棺の前で、考える。私たちは何だったのか。私たちが知りたいことを。

デモは人間の快樂から逃れながら、人間が生きる意味を考え続ける。

デモ 可能性の星、まだ誰にも荒らされぬ星、まだ何でもない星、まだ成長過程でもない星、私たちは宇宙。ちりと埃、それっぽっち。

毛布を持ったデモが、快樂を逃れるダンスを踊る。

快樂につかまらないように、永遠に踊り続ける。

手に持つライナスの毛布が、

センを見送るように、

まるで旗のようにはためいた。

「宇宙は私で、私は宇宙だ」

こちらから、

毛布を旗めかせてデモが踊る。

あちらから、

センがやってくる。

その二人がすれ違う。

古いものから、新しいものへ。

すれ違って、

離れていく。

挨拶はお日さま。

挨拶はお月さま。

踊ることをやめない。

生きることをやめない。

やがて、

いつかの調査員たちの声が聞こえる。

まるで、踊るセンとデモを眺めるように。

聞こえてくる。

調査員 b 見えます。

調査員 a 見えるか。

調査員 b 見えます。

調査員 a 何が見える？

調査員 b 見えませんか？

調査員 a 見える。

調査員 b 砲弾。

調査員 a 弾丸。

調査員 b そのアト。

調査員 a 荒地。

調査員 b そこに残骸。

調査員 b 録音機。

調査員 a 棺。

調査員 b テーブル。

調査員 a ティーカップ。

調査員 b 食卓。
調査員 a ベッド。
調査員 b 埋もれる、
調査員 a 営み。
調査員 b それら。
調査員 a 埋もれる。
調査員 b 言葉。
調査員 a 消えていく。
調査員 b 言葉。
調査員 a になるまえの
調査員 b 言葉。
調査員 a 見える。
調査員 b 見上げる、
調査員 a その向こう、
調査員 a 揺れる、
調査員 b 朝日。
調査員 a 夕闇。
調査員 b 太陽。
調査員 a 月。
調査員 a ハロー。
調査員 b 在る。
調査員 a ハロー。
調査員 b まだ
調査員 a ハロー。
調査員 b 在る。
調査員 a ハロー。
調査員 b また在る。
調査員 a ハロー。
調査員 b グッドバイ。
調査員 a いつかまた。
調査員 b ハロー。
調査員 a いつしかまた。
調査員 b ハロー………

そこに人間がいて、
そこに争いがあって、

言葉を費やして、
残ったもの。

弾丸であり、言葉。

そしてやってくる無音。

言葉のない世界。

そこにまた人は言葉を降り注ぎ、

また新しい生命体を探し始めるのだ。

おしまい